

「ヨハネによる福音書」を読む 第5回  
ヨハネ福音書 第9～10章

2009年9月13日（東京 新宿）

奥田 昌道

私たちは極限的状況の中にいる 幾千代にも及ぶ慈しみ 本人の罪（エゼキエル書20章） 神の業がこの人に現れるため イエスさまと出会う 霊の眼が開かれた 日本の知識人は評論家 羊と羊飼いのわたしは羊の門である 安息日を破り神を冒瀆した 生くるはキリスト、死ぬるもまた益なり 祈り

## ● 私たちは極限的状況の中にいる

今日は、皆さんと一緒にヨハネ福音書を読むの第5回ということで、9章と10章が今日の対象です。この福音書といましようか、イエスさまとの出会いというものは、本当に各人ギリギリの所で出会うのだと思います。この世の春を謳歌している人はちよつと出会いにくいんですね。心がそつちに向かないんですよ。

「自分は幸せでうまくいっていますから、何が流れてきても、今は結構です」ということになる。ところが、

「もうどうにもなりません、何とかしてください」

という、ギリギリのところでも苦しんだり悩んだりもがいている人に対しては、まずそれが響いてくる。中に入ってくる。そういう思いがいたします。あまりにも極限的なのですから、なかなか一般の人には馴染み（なじ）が薄いのではないかと思う。でも、私たちは常に実はみな極限的状況の中にいるんですよ。

昨今の世相をみておりましたが、いったいこの先、何が起こるかわからない。それは国としてもそうだし、自治体もそうでしょうし、その他いろいろなものを見ましても、絶対安全なんてものはありえませんし、ましてや個人におきましては何が起こるかわからないという状況です。しかも、なかなか出口が見えない。たとえば、新型インフルエンザという問題でも、これからどんどん流行（はや）ると言われているでしょ。学校では、休校にしたらいののか、どうしたらいいのだろうか、みな困っています。しかも、日本だけではない。アメリカでもいろんな所でそういう問題が起こっています。こんなことは歴史上で未だかつてなかったと思うんですよ。バイ菌も、鍛えれば鍛えるほど強くなる。我々と一緒ですよ。我々の霊的な生命も、鍛えれば鍛えるほど強くなる。だから結局、戦いですよね。

キリストはルカ伝の中で仰っている。



「肉体の命を滅ぼすことができても、それ以上何もできないものたちを恐れることはしない。肉体が死んだのちに、なお魂を、霊魂を地獄に放り込むことのできる方を恐れなさい」

と言われました。私たちは、この見える世界というのは、すべて自然的生命を何とか保ち、そして我々の住んでいる世界を何とか良くしようという、懸命な努力をするけれども、片一方でそれをあざ笑うごとく悪がはびこる。しかも、それは人間の悪だけではない。病原菌だとか何だとか、そういうものがどんどん強くなって、それが拮抗きつこうして戦っているという、これが現状ではないかと思う。

そういう、今の世において、このヨハネ伝を学んでいるというのはどういう意味があるのだろうか、皆さん、思われるかもしれないけれども、私にとってはものすごくこれは近いんです。本当に身親しいという感覚でこれを読みます。そこで今回、9章と10章の二つの章をとりあげて、皆さんと一緒に味わいたいと思います。

### ● 幾千代にも及ぶ慈しみ

9章を新共同訳で読んでいきます。

「1さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。<sup>2</sup>弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親が罪を犯したからですか。3イエスはお答えになつた。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業わざがこの人に現れるためである。4わたしたちは、わたしをお遣わしになつた方の業を、まだ日のあるうちに行かねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。5わたしは、世にいる間、世の光である。6こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになつた。7そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行つて洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行つて洗い、目が見えるようになった。8近所の人々や、彼が物乞いをしていたのを前に見ていた人々が、「これは、座つて物乞いをしていた人ではないか」と言つた。9「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言つた。10そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、11彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行つて洗いなさい』と言われました。そこで、行つて洗つたら、見えるようになったのです。12人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言つた。」(ヨハネ9・1～12)



非常にビビッドに（*vivid* 躍動的、鮮明に）というか、鮮やかに、目に見えるように描かれていますね。このドラマの中に私たちは入っていると思う。まず、「さて」といって、「何年何月何日」なんて何も書いてない。

「さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。  
2 弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、  
だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」

こんな質問したのには理由があります。旧約聖書にも原因がちよつとある。

「ユダヤ人の間では、病気や不幸は、両親や先祖、また本人の犯した罪の結果だと一般的に信じられていた。あるラビたちは、胎児さえ罪を犯し得ると教えていた」

というふうに註解書に書いてある。「新約聖書」改訂版、フランシスコ会聖書研究所注」。先祖が罪を犯したらどうなるかということをちよつと旧約聖書から拾ってみます。出エジプト記の20章4節。

「4 あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、  
また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。

要するに、偶像を造るなということですよ。

5 あなたはそれらに向かつてひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。  
い。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、

父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、

ここを引つ張ってきている。ところがそのあとに、

6 わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。」

（出エジプト20・4～6）

「幾千代」という無限の長さに対して、「三代、四代」という、ほんの僅かなんです。ところが、この僅かなものをとらえて、目が見えない状態であるとか、生まれながらに何か不幸な出来事に出会っている人がいたら、

「これはいったい先祖の罪ですか？」

というふうには、反応したわけです。

それから、申命記5章9節。申命記というのは出エジプト記の繰り返しのような所ですけど、この5章にまた十誡が出てくる。

「9……わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、

四代までも問うが、10 わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代に

も及ぶ慈しみを与える。」（申命記5・9～10）

同じことの繰り返しです。それから、出エジプト記34章。これは詳しい。十誡を二回目にもらう時のことです。一回目の十誡の板は叩き壊してしまう。もう一回もらいに行つて、そしてもらつてきたのがこの34章に出てくる。



「<sup>4</sup>モーセは前と同じ石の板を二枚切り、朝早く起きて、主が命じられたとおりシナイ山に登った。手には二枚の石の板を携えていた。<sup>5</sup>主は雲のうちにあって降り、モーセと共にそこに立ち、主の御名を宣言された。<sup>6</sup>主は彼の前を通り過ぎて宣言された。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、<sup>7</sup>幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に二代、四代までも問う者。」<sup>8</sup>モーセは急いで地にひざまずき、ひれ伏して、<sup>9</sup>言った。「主よ、もし御好意を示してくださいますならば、主よ、わたしたちの中にあって進んでください。確かにかたくなな民ですが、わたしたちの罪と過ちを赦し、わたしたちをあなたの嗣業として受け入れてください。」(出エジプト 34・4～9)

ここにもはつきりと、恵みと慈しみの方が極端に重い。

「罰すべきものを罰せずにはおかない。父祖の罪を子や孫に三代、四代までも問う」

と。罰すべきものを罰しないということは不義の神になってしまう。義なる神は、義が踏みにじられたら、それを容認できない。だから、それは罰する。三代、四代までも。しかし、慈しみと恵みの方がもつと力強く書かれています。

「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、<sup>7</sup>幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。」

と。こつちが本当なんですね。ところが、ユダヤ人たちは、ちよびつとした方にばかり目をとめて、「この人の親の罪ですか、先祖の罪ですか、それとも本人ですか」と問う。

### ●本人の罪(エゼキエル書18章)

「本人の罪」ということに関しては、エゼキエル書に素晴らしいところがある。エゼキエル書18章を見てください。これは非常に近代的で、法律家が歎びそうなところですよ。

「主の言葉がわたしに臨んだ。<sup>2</sup>「お前たちがイスラエルの地で、このことわざを繰り返して口にしてるのはどういうことか。『先祖が酔いぶどうを食べれば子孫の齒が浮く』と。」

つまり、先祖が変なことをしていけば、それが全部、子孫に祟り<sup>た</sup>となっていく。いつまでも臨んでくると。

<sup>3</sup>わたしは生きている、と主なる神は言われる。お前たちはイスラエルにおいて、このことわざを二度と口にする<sup>4</sup>ことはない。<sup>4</sup>すべての命はわたしのものである。父の命も子の命も、同様にわたしのものである。罪を犯した者、その人が死ぬ。」



自己責任だという。

5もし、ある人が正しく、正義と恵みの業を行うなら、<sup>6</sup>すなわち、山の上で偶像の供え物を食べず、イスラエルの家の偶像を仰ぎ見ず、隣人の妻を犯さず、生理中の女性に近づかず、<sup>7</sup>人を抑圧せず、負債者の質物を返し、力づくで奪わず、飢えた者に自分のパンを与え、裸の者に衣服を着せ、<sup>8</sup>利息を天引きして金を貸さず、高利を取らず、不正から手を引き、人と人との間を真実に裁き、<sup>9</sup>わたしの掟に従って歩み、わたしの裁きを忠実に守るなら、彼こそ正しい人で、彼は必ず生きる、と主なる神は言われる。

だから、<sup>みこころ</sup>御意にかなって生きる者は必ず生きる。

<sup>10</sup>彼に生まれた息子が乱暴者で、これらの事の一つでも行う人の血を流し、<sup>11</sup>自分自身はこれらすべての事の一つですら行わず、かえって山の上で偶像の供え物を食べ、隣人の妻を犯し、<sup>12</sup>貧しい者、乏しい者を抑圧し、力づくで奪い、質物を返さず、偶像を仰ぎ見て忌まわしいことを行い、<sup>13</sup>利息を天引きして金を貸し、高利を取るならば、彼は生きることができようか。彼は生きることができない。彼はこれらの忌まわしいことを行ったから、必ず死ぬ。その死の責任は彼にある。

親がどんなに義人であっても、子供が目茶苦茶なことをやったら、これは子供が自己責任で審判を受ける。そういうことを言っている。

<sup>14</sup>ところで、その人にまた息子が生まれ、彼が父の行ったすべての過ちを見て省み、このような事を行わないなら、<sup>15</sup>すなわち、山の上で偶像の供え物を食べず、イスラエルの家の偶像を仰ぎ見ず、隣人の妻を犯さず、<sup>16</sup>人を抑圧せず、質物を取らず、力づくで奪わず、飢えた者に自分のパンを与え、裸の者に衣服を着せ、<sup>17</sup>貧しい者の抑圧から手を引き、天引きの利息や高利を取らず、わたしの裁きを行い、わたしの掟に従って歩むなら、彼は父の罪のゆえに死ぬことはない。必ず生きる。<sup>18</sup>彼の父は搾取を行い、兄弟のものを力づくで奪い、自分の民の中で善くない事をしたので、自分の罪のゆえに死んだのである。<sup>19</sup>それなのにお前たちは、『なぜ、子は父の罪を負わないのか』と言う。しかし、その子は正義と恵みの業を行い、わたしの掟をことごとく守り、行ったのだから、必ず生きる。<sup>20</sup>罪を犯した本人が死ぬのであって、子は父の罪を負わず、父もまた子の罪を負うことはない。正しい人の正しさはその人だけのものであり、悪人の悪もその人だけのものである。

これを「一身専属」と申します。その人だけの固有のものである。

<sup>21</sup>悪人であっても、もし犯したすべての過ちから離れて、わたしの掟をことごとく守り、正義と恵みの業を行うなら、必ず生きる。死ぬことはない。



悪人だつて悔い改めれば、必ず生きる。

<sup>22</sup>彼の行つたすべての背きは思い起こされることなく、行つた正義のゆえに生きる。<sup>23</sup>わたしは悪人の死を喜ぶだろうか、と主なる神は言われる。彼がその道から立ち帰ることによって、生きることを喜ばないだろうか。<sup>24</sup>しかし、正しい人でも、その正しきから離れて不正を行い、悪人がするようなすべての忌まわしい事を行うなら、彼は生きることができようか。彼の行つたすべての正義は思い起こされることなく、彼の背信の行為と犯した過ちのゆえに彼は死ぬ。

そのようなことがここに書いてある。少し飛ばして、

……<sup>27</sup>しかし、悪人が自分の行つた悪から離れて正義と恵みの業を行うなら、彼は自分の命を救うことができる。<sup>28</sup>彼は悔い改めて、自分の行つたすべての背きから離れたのだから、必ず生きる。死ぬことはない。<sup>29</sup>それなのにイスラエルの家は、『主の道は正しくない』と言う。イスラエルの家よ、わたしの道が正しくないのか。正しくないのは、お前たちの道ではないのか。<sup>30</sup>それゆえ、イスラエルの家よ。わたしはお前たちひとりひとりをその道に従つて裁く、と主なる神は言われる。悔い改めて、お前たちのすべての背きから立ち帰れ。罪がお前たちをつまづかせないようにせよ。<sup>31</sup>お前たちが犯したあらゆる背きを投げ捨てて、新しい心と新しい霊を造り出せ。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。<sup>32</sup>わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰つて、生きよ」と主なる神は言われる。（エゼキエル18・1～32）

このエゼキエル書は素晴らしい所ですよ。こういう所があるにもかかわらず、当時の人たちは、「先祖の罪ですか、本人の罪ですか、誰の罪ですか」と、そういう原因探しをやっていた。それに対して、イエスのお答えというのが素晴らしい。

### ● 神の業がこの人に現れるため

「<sup>2</sup>弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。<sup>3</sup>イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」

イエスは原因探しをなさっていない。両親が何かの罪を犯しているかもしれない。本人が何か罪を犯しているかもしれない。神さまの目からみたら、そんな義人なんて一人もないから。でも、イエスはここで、そんなことを全然問題にしておられない。

「この人の上に神の業が現れるためである」



と。「神の業が現れる」とは、「神さまがお働きになる」ということです。これは素晴らしいと、私はここを読むたびに感動する。我々の住んでいる社会というのは、だいたい因果応報の考え方に立っています。そうじゃありませんか。「あそこ（古い）に行つて観てもらつてきなさい」と。観てもらおうと、

「あなたの先祖は何か変なことをしたようです、黒いものが映ってますよ」とか何とか言つて、

「ご浄霊します、お金を出しなさい」  
なんていうのが流行つていましょ。

「先祖の祟りから遁れるのにこうしなさい」

とか。日本の社会には、「祟り」だとか何だとか、そういうのがずうつと蔓延しているような社会ではありませんか。そういう中であつて、このイエスの答えというのは、原因と因果とかいうことは一切問うておられない。とにかく、

「この人の上に神の業が現れるんだよ」

と仰つてくださった。しかもそれは、私から見たら、非常な慈しみの目をもつてこの人を見ておられる。

この人は生まれながらに目がみえなくて、生業は何もできない。成人しても、ただ道端に坐つて、恵みを求める、乞食をする。それだけの生活を20年か30年か知りませんが、それを続けていた。その人を見た時、

「いったい、この人のこのような不幸な状態になつたのは誰の罪ですか、親で

すか、本人ですか」

と、これは物凄く残酷な問いではありませんか。それに対してイエスはまず、

「気の毒だ」

ときつと思われたにちがいない。その人の心を読んでいらつしやるのかも知れない。そして、

「この人の上に神の業が現れるためである」

と仰つた。

私の孫だつてそうなんですよ、生まれながらの福山型の筋ジストロフィーなんです。いったい誰の罪ですか。お医者さんは、何か染色体の関係だといって、その医学的な原因は突きとめてくれた。でも、なぜ染色体の異常が起こつて、そして滅多にない組み合わせがそんなところに出てきたのかなんて、ちよつとわからない。しかしながら、現実に上の子どもの子も、そういう身体で生まれてきました。私は、

「神の業が現れんためなり」

と、これを素直に受けとつている。この子たちをとおして、この子を育てる過程をとおして、どんな素晴らしい御業を主がなさつてくださるか。それをずうつと思ひ続けてきました。そして、筋ジストロフィーの子供さんたちは寿命が短い。医学的には大体どのくらいとい



うことをほぼ推測がつくそうです。

今、100歳以上の人が40,399人と発表になりました。女性が87%占めている。男性はたったあと残りの13%でしかないけれども。そういう長寿ということもひとつの祝福でしょう。けれどもまた、本当に短い人生であっても、それが本当に主の憐れみと愛に満ちあふれて、御業が現れるような生き方をしていけば、これまた物凄い祝福ではないでしょうか。私たちは、自分でこうありたいという願いはあるでしょう。けれども、私たちはみな賜りたる命なんです。自分でつくりだした命ではない。賜りたる命です。しかも、さつきエゼキエルは

「新しい心と新しい霊をつくりだせ」

と言いました。自分たちからは出てきません。これは頂かなければ。上から頂かなければ、この「新しい心と新しい霊」は、願ってもそれは自分たちでプロデュース（作り出す）できません。生命もプロデュースできません。すべてどんな命も、肉体の命も、霊の生命もすべては、神さまから頂くものなんです。そのためにいろんなものを神さまは備えてくださる。肉体の命も大事だし、自然環境というものを備えてくださっている。

ですから、もうこのヨハネ伝の入口だけでも、私は自分の置かれている状況からして、そういうことを感じるんです。

「この人の上に神の業が現れんためなり」

と。皆さん、そういうイエスの言葉を聞いて、感動されますか、それとも腹立たしく思われますか。目の見えない姿に生み出しておいて、

「神の業が現れるためであるとは、なんと身勝手な神さまか」

と。そんなふうを受けとつたらもう終わりです。そうではなくて、人間の中にいてどんな不幸な生まれ方をしようと、時には生まれ自身が、例えば強姦によってだとか、そういう酷いことよって生まれることもあるわけです。そういうことを知った子供さんというのは、どんなに傷つくだろうかと。もちろん、お母さんも傷ついている。それらのことに対して、やはりイエスは、

「神の愛が現れんためなり。不幸に泣いている者よ、涙をぬぐいなさい。私がその涙をぬぐってあげるから。悲しんでいる者は幸いだ。その人は慰められる」

と山上の垂訓にあります。そういうふうには、イエスというお方が見てくださる見方というのは全く我々と違うんです。全く逆なんです。それはそれを味わった人しかわからない。だから、実に慰め深い素晴らしいお答えだと私は思った。

「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」

と。そして、イエスはこの方の上に働かれた。しかも、働かれ方がまた凄いですね。イエスは地面に唾をした。軽犯罪法違反ですよ（笑）。唾で土をこねて泥を作って、それを目



の见えない人の目に塗る。こんなことをされたら、普通は怒りますよね。

「私は不幸な人間だ、それはわかつている。しかも、その私に泥を塗って、シロアムの池へ行って洗いなさいと言われた」

なんて、普通なら怒ると思うけれども、この人は一言も文句を言っていない。しかも、通りすがりのお方はどうもイエスであるということにはわかっている。

イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。<sup>7</sup>そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。

この目の见えない方も素晴らしいですよ。弟子とイエスさまの問答を聞いている。どうも、イエスというお名前もそういう問答をとおして——ここには簡単な問答しか書いてありませんけれども——何かそういうことで、イエスというお方だということが分ったんですよ。その方が泥をこねて目に塗って、

「さあ、あのシロアムの池へ行って洗いなさい」

と言われた。それで、「はいっ」と言って、そのとおりにした。これが信仰ということなんです。とにかく、何かひとつ文句のありそうな状況の中で、この人は一言も言わない。「はいっ」と言って、そのまま池へ行って洗った。

「シロアムの池」というのは、註解書によると、次のように書かれています。

「長さは17m、幅は5mくらいの人工池で、水はギボン（乙女）の泉から引かれている。ヒゼキヤ王の時代(前721～前688)にアッシリアのセンナケリブの攻撃に備えて、ギボンの泉から城壁内のシロアムの池までトンネルの水道が掘られた。トンネル内にはシロアム碑文が刻まれている。」

そういうギボンの泉から水道で引いてきた池なんです。この「シロアムの水」に関してイザヤ書8章6節に、

「<sup>5</sup>主は重ねてわたしに語られた。<sup>6</sup>この民はゆるやかに流れるシロアの水を拒み、レツインとレマルヤの子のゆえにくずおれる。<sup>7</sup>それゆえ、見よ、主は大河の激流を彼らの上に襲いかからせようとしておられる。すなわち、アッシリアの王とそのすべての栄光を。激流はどの川床も満たし、至るところで堤防を越え、<sup>8</sup>ユダにみなぎり、首に達し、溢れ、押し流す。その広げた翼は、インマヌエルよ、あなたの国土を覆い尽くす。」（イザヤ8・5～8）

「シロアムの水」というのは、とても優しい生命の水のようですね。「ゆるやかに流れるシロアの水を拒み」という。不信仰の道です。だから、「大河の激流が彼らを襲う」としている。それは即ちアッシリヤがユダヤを呑み尽くしてしまうという。そういうふうなことで引かれている。



ですから、「シロアムの池」というのは、そういう意味でこの「遣わされたる者の池」とか、癒しとか救いということと関わりが深いように思います。「そこへ行きなさい」と言われて、行って洗ったら目が見えるようになった。

### ● イエスさまと出会う

「<sup>8</sup>近所の人々や、彼が物乞いをしていたのを前に見ていた人々が、「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。<sup>9</sup>「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしは、そんなのです」と言った。<sup>10</sup>そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、<sup>11</sup>彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい』と言われました。そこで、行って洗ったら、見えるようになったのです。」「<sup>12</sup>人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。

<sup>13</sup>人々は、前に盲人であった人をファリサイ派の人々のところへ連れて行った。<sup>14</sup>イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであった。<sup>15</sup>そこで、ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。彼は言った。「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」「<sup>16</sup>ファリサイ派の人々の中には、「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。<sup>17</sup>そこで、人々は盲人であった人に再び言った。「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか。」彼は「あの方は預言者です」と言った。

<sup>18</sup>それでも、ユダヤ人たちはこの人について、盲人であったのに目が見えるようになったというのを信じなかった。ついに、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、<sup>19</sup>尋ねた。「この者はあなたたちの息子で、生まれつき目が見えなかったと言うのか。それが、どうして今は目が見えるのか。」「<sup>20</sup>両親は答えて言った。「これがわたしどもの息子で、生まれつき目が見えなかったことは知っています。<sup>21</sup>しかし、どうして今、目が見えるようになったかは、分かりません。だれが目を開けてくれたのかも、わたしどもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう。」「<sup>22</sup>両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちの恐れ<sup>おおやけ</sup>からである。ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである。<sup>23</sup>両親が、「もう大人ですから、



本人にお聞きください」と言ったのは、そのためである。

まあ両親の立場もわかりますけれども、悲しいですね。20数年あるいは30年にわたって目が見えないで乞食をしている。その息子を癒してくれたんです。息子はちゃんと親に対しても——ここには時間的なことは何も書かれていませんけれども——この人は両親の所へ行行って、

「実はこんなふうにして私は癒された。喜んでちょうだい」

と、きつと言っているにちがいない。この本人はパリサイ人の所に連れていかれても、どうしようと告白しています。

「お前はあの人をどう思うか？」

「預言者です」

とはつきり言っている。でも、パリサイの人々は納得しない。両親を呼んできて、尋問が始まる。

「これはお前の息子か？ 目が見えなかったのに見えるようになったのはどうしてなのか？ 答えてごらん」

「はい、良心に誓って真実を申しあげます。これは私の息子です。生まれながらに目が見えなかったのは事実です。しかし、どのようにして目が開いたか、それは私は知りません。本人に聞いてください。以上」

と（笑）。何かせつないですね。私は、こんなに素晴らしいことになったら——自分も息子も一体なんですよ——パリサイ派にやつつけられるなら、一緒にやつつけられましよう。息子はこのあとやつつけられるんです。追放される。それを親は知らん顔する。親と子供は本当に一体であるはずなのに、そういう思いがいたします。しかし、憎きはパリサイ人ですよね。本人を追及して納得できないので、親を連れ出して尋問する。でも、いい答えが得られない。それで今度また本人をもう一度呼び出す。

24さて、ユダヤ人たちは、盲人であった人をもう一度呼び出して言った。「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」<sup>25</sup>彼は答えた。「あの方が罪人か<sup>つみびと</sup>どうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということ<sup>と</sup>です。」

彼は事実だけを言っている。

「あの人があんなお方か。『あの方は罪びとだ』とあなた方は言うけれども、そんなことは、私は知らない。ただ一つ知っているのは、目の見えなかった私が今は見えるという、この厳然たる事実です。これをどう判断なさるか、それはあなた方のご判断に任せますよ」

と、そういう言い方をしました。



26すると、彼らは言った。「あの者はお前にどんなことをしたのか。お前の目をどうやって開けたのか。」<sup>27</sup>彼は答えた。「もうお話ししたのに、聞いてくださいませんか。なぜまた、聞こうとなさるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」

だんだん挑発的になってきた。初めは「預言者です」と言って、今度は「弟子になりたいんですか?」と言いました。

<sup>28</sup>そこで、彼らはののしって言った。「お前はあの者の弟子だが、我々はモーセの弟子だ。<sup>29</sup>我々は、神がモーセに語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのかは知らない。」<sup>30</sup>彼は答えて言った。「あの方がどこから来たか、あなたがたがご存じないとは、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。<sup>31</sup>神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。<sup>32</sup>生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。<sup>33</sup>あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならないかたはずです。」<sup>34</sup>彼らは、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言い返し、彼を外に追い出した。

追放したということです。自分たちの会堂から追放する。誰も交わりをしない。そのようにして彼を除け者にしました。

<sup>35</sup>イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会うと、「あなたは人の子〔メシア〕を信じるか」と言われた。<sup>36</sup>彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたのですが。」<sup>37</sup>イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」<sup>38</sup>彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、<sup>39</sup>イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」

「もうあなたはその人に出会っているよ、私だよ」  
目を開いていた時は、イエスはすぐ去って行かれたものだから、よく知らなかった。ところが今は目の前に立っていらつしやる。

「人の子を信じるか」

「はい、信じたいんです。その方はどこにおられますか。目を開けてくださった方はどこにいらつしやいますか」

「目の前に立っている私だよ」

と。だから、この人は喜んだですよね。



「あなたはもうその人を見ている。あなたと話しているのがその人である」と。これはもう夢かという驚きと喜びでしょうね。まず癒していただいたということ、その感謝が満ちあふれている。

「できればもう一度その方にお会いしてお礼を申しあげたい」

と思っていたかもしれません。でも、追放されてしまって天外孤独な彼の所に、イエスがわざわざ訪ねてきてくださって、話しかけてくださっている。一対一で目と目、顔と顔を合わせて見ている。こんな嬉しいことがあるでしょうか。もう何を失ってもいい。この方と一つならば、何を失ってもいいと。

イエスさまと出会うというのはそういうことなんです。過去の自分、惨めだった自分を、それを全部かなぐりすてて、新しく生まれた。この方と一緒に歩いていくんだ。それがどんな苦難の道であろうと、この世の人からは罵られ蔑まれ、追放されて孤独であろうと、この方と出会ったことがすべてだと。それだけのものをイエスは下さっているんです。さっきのエゼキエルが言った、「新しい心と新しい霊」を下さる。そういう出会いです。

### ●霊の眼が開かれた

ヨハネ伝をずうつと見てみると、どんなふうにも人はイエスに出会っているかということ、第1章から、皆さん、思いおこしてください。1章では、ナタナエルというのが出てきます。

「ナザレから何の良き者が出ようか」

と言っていた。ところがイエスは

「ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたはあの無花果いちじくの木の下のにおったね」

と。何百メートルも離れている所のナタナエルの姿をちゃんとイエスは見ておられた。それだけで彼は参ってしまった、

「あなたは預言者です!」

「お前は正直者だ」

と言ってイエスは誉められた。そういう正直な人間が好きなんです、イエスは。きどっている奴とか、偽りを言う奴は嫌なんです。ナタナエルはすっかりひっくり返ってしまった。それから、3章にいきますと、ニコデモとの対話があります。ニコデモは立派な学者ですけれども、夜こっそりイエスの所にやって来た。

「神さまがご一緒でない、あなたがなさっているような業はできません」

と。イエスは

「人は新たに生まれなければ、神の国を見ることはできないぞ」

と——ピシッと正面から「お面!」と叩かれた——ニコデモは狼狽ろうばいしたということが出てきます。4章にいきますと、サマリヤの女です。身持ちのいい女ではなさそうで、



「五人の夫がいたけれども、今一緒に住んでいるのは夫ではないよね」  
なんて言われた。それですっかり彼女は参ってしまったって、水瓶を置いたまま邑まちへ行つて、

「私のことを言い当てた人がいます。預言者ですよ！」

とか言つて、邑の人がやつて来たという場面があります。5章にいきますと、38年間、病で苦しんでいた人を癒した。でも、この人はあまり良くなかったですね。6章は、パンの奇蹟が出てきます。8章は、夜明け方、姦淫の現場を捕えられて引きずり出されてきた女性のことが出てきます。人々は彼女を何とか罰しようとして、イエスを困らせようとしてやつて来た。ところが、

「お前たちの中でこの女性に対して石を投げ打つ資格がある者は石を取りなさい」

と。その一言葉で人々は胸を刺され、良心の咎とがめを感じて、一人ずつ立ち去って行った。終わりにはその女性とイエスだけが残つたという場面があります。まだ靄もやが立ち込めていような朝方です。

「私もあなたを罰しない。もう罪を犯さないように」

と。それから後のことは出てきませんけれども。この女性は命を救われた。石打ちに遭つて当然なんです、モーセの律法によれば。それを赦していただいた。

「私もあなたを罰しない、罪しない。もう重ねて罪を犯さないように」

と言つて帰された。もうこの女性はそれですっかり心を入れ換え、生まれ変わったにちがいないと、私は思っています。

みんなギリギリのところまでそのようにして、イエスによつて救われ、新しくされているんです。そして、今日の生まれながらの目の見えない方のお話でしょ。

「39 イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」

40 イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々も見えないということか」と言った。

これは大変なことを仰いますね。

「見えない者が見えるようになる、これは今あなたがなさったことだから、わかります。けれども、見える者が見えないようになるとはどういうことですか。私たちはこれから視力を失うんでしょうか。我々も見えないということなのか」

と。

41 イエスは言われた。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」

「禪問答のようなことを仰いましたね。この癒された方は確かに視力がなかった。それを肉



体の眼が開かれ、ものが見えるようになる。と同時にもつと大事なことは、心の眼が開かれた、霊の眼が開かれた。神さまを信ずるようになるに、イエスを信ずるようになった。生まれ変わった。これがもつと大事なことなんです。

「神の業がこの人に現れる」

ということはそういうことです。今までの20数年あるいは30数年の不幸な状態から、一変して肉体の眼が開かれただけでなくて、霊の眼が開かれた。永遠の生命へ道が開かれた。これが凄いことです。

ところが、パリサイ派の人たちはどうかというと、ことごとくイエスに食ってかかっています。まだイエスを審こうとしている。「見える、見える」と言い張っている。こういう素晴らしい御業を見ても、なお彼らの心は頑かたなであって、それを受け入れようとしません。

「俺たちはモーセの弟子だ。お前はどこから来たのか」

と、そういうことでイエスという方を受け入れようとしません。素直な心の人だったら、血筋がどうであろうと、どういう生まれ方をしようと、その人の全存在をじつと見て、

「こんなことは人のできることではない。この人の姿は崇高だ」

ということが写ると思うんです。それを先入観というものが全く歪ゆがめている。色眼鏡めがねをかきかせてしまっている。だから、実は「見える、見える」といつても何も見ていない。本ものを見る力が全然ない。しかも、「自分たちは見える」と言い張っている。パリサイ人は「見えない」と素直に言うならば、まだ眼が開かれる余地があるのに、見えないのに「見える」と言い張っている。

「それだから、あなた方は罪が残るんだよ」

と。

### ●日本の知識人は評論家

キリスト教が日本に入ってから、少なくともプロテスタントは150年から165年だと言っている。カトリックはもつと早くから、フランシスコ・ザビエルなんか来てますから、もつと長いけれども。プロテスタントでも150年から165年だと言われています。ところが、日本社会になかなか根付かない。特に知識人の方々がなかなか受け入れようとしません。一方では「プロテスタントは知識人に語りかけているから、庶民はなかなか伴ついて来ないんだ」

という批判がある。武士階級に伝えられた。武士の知的な人たちに伝えられてきた。だから、どうしても頭の信仰になって生活の中に浸透しないということ、一方では言われる。かと思うと、他の知識人は——信じる知識人はまだいい——何だかんだと言って、キリストを受け入れようとしません。キリスト教の悪口は散々言いますよ、

「宗教戦争をやっている、こんな悪いことをした、あんなことをした」



と、キリスト教の歴史をとりあげては批判します。自分たちは、生命がないのに、それに気づかない。批判者、評論家なんです。これが日本の知識人だと思う。だから、

「キリスト教だ、何だという宗教ではない」

と私は言うんです。キリストという人格、一人のキリストという、イエスというお方、その人の全存在。我々は歴史家ではないから、それ以上のことはわからないけれども、少なくとも福音書に表われているイエスという方の言葉、行為、全存在、そしてこのキリストを受けて活躍した使徒行伝の殉教者たち。そしてそのあと脈々と本来のものが受け継がれている人たちの姿。そういうものを素直に受け入れたら、

「イエスという方は桁違いのお方だ」

ということがわかるはずだと思う。イエスは一切、武器を取っておられません。全く素手です。そして、己れに何も求めておられない。与えるだけ。与えっぱなしです。しかも、なされたことが——また若干、意図的などころもありますけれども——安息日という日にいろんな御業をなされた。ユダヤ人たちは、

「安息日は一切、何事もしてはならない」

と、金科玉条にこの律法に縛られた。そして安息日を破れば死刑なんです。イエスは安息日にいろんな癒しをなさっています。38年間の病を癒されたり、盲人の目を開かれたのも安息日だった。

「安息日にこんなことをやる奴は罪びとにちがいない」

と、そういう先入観で審こうとする。本当にそういう上つ面うわつらのものを全部かなぐり捨てて、裸の姿で虚心坦懐に見るということができない。これが「目が見えない」という姿なんです。本ものが見えない。しかも「見える」と言い張って審いている。現在も正にそういう状況ではないかと思う。もし、皆さんが、

「私はイエス・キリストを信じている。キリストのお弟子です」

と告白したら、

「ああそう良かったね。どうやって信じたの？ 自分も信じたいよ」

と言う人に出会われたら、こんな幸いなことはないですよ。まず100人のうちの99人は、ボロクソに言います、あるいは悪口を言います。

「キリスト教なんてだめだ、日本人に相応ふさわしくない。東洋には東洋の良さがある。

東洋の心を見る」

とか、そういうふうなことを言います。何だか批判することに無上の歓びを見出しているような感じさえする。

「それでは、あなたには生命がありますか」

と訊くと、

「さあそれは……」



と言う。

「私には永遠の生命があります！」

と言って胸を張って輝いている人は、批判者の中にどれだけいるか。だから、皆さんは、そういう上辺うわべの勝負ではなくて、

「わが内には光があります。私はかつては目が見えなかった。霊の目が閉ざされていた。けれども、今は霊の目が開かれて、本当に天界のことが慕わしくて慕わしくて、イエスというお方に本来なら目と目を合わせるように会いたいです。ところが、今は残念ながら、そのお方は肉眼では見えない。そのお方が私の心を照らして下さっている。その方が私の中に住んで下さっている。これはわかるんです。でも、そのお方の姿はまだ見たことがありません。でも、私の希望の星です、私の生命です」

と、語りながら目が輝いてくる、顔が輝いてくる、こういう姿。これが、目を癒されたこの方の姿はこれだったと思う。パリサイ人と問答しながら、だんだん輝いてきた。

「あなたもお弟子さんになったらどうですか」

なんて言っている。非常に現代的ではありませんか、この問答というのは。そんなふうには受けとりたいたいと思いました。

### ●羊と羊飼

第10章は、「羊と羊飼」のことが描かれています。

「1」はつきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人ぬすびとであり、強盗である。2 門から入る者が羊飼いである。3 門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。4 自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているのです、ついて行く。5 しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。6 イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことかわからなかった。

7 イエスはまた言われた。「はつきり言っておく。わたしは羊の門である。8 わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。9 わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。10 盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。11 わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。12 羊飼いでなく、自分の羊



を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。――狼は羊を奪い、また追い散らす。――<sup>13</sup>彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。<sup>14</sup>わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。<sup>15</sup>それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。<sup>16</sup>わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。<sup>17</sup>わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してください。 <sup>18</sup>だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」

<sup>19</sup>この話をめぐって、ユダヤ人たちの間にまた対立が生じた。<sup>20</sup>多くのユダヤ人は言った。「彼は悪霊に取りつかれて、気が変になっている。なぜ、あなたたちは彼の言うことに耳を貸すのか。」<sup>21</sup>ほかの者たちは言った。「悪霊に取りつかれた者は、こういうことは言えない。悪霊に盲人の目が開けられようか。」

ここで、「羊と羊飼い」のことが二つの譬話で出てきます。まず初めの1節から6節のところ。

「羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、ぬすびと盗人であり、強盗である。」

と。羊は囲いで囲われている。この囲いは頑丈な石で造られていたようです。註解書によりますと、

「パレスチナでは羊の囲いはたいて人の背丈くらいの石垣で出来ており、出入口は一つしかなかった。羊の群れは通常、囲いの中で夜を過ぬす。」

と。私たちは、「囲い」というと、何か木の柵で囲まれて、どこからでもすつと潜り抜けられそうな木の柵を思うけれども、頑丈な石垣で、しかも背の高さくらいまであったというから、なかなかそう簡単に乗り越えられないように出来ていたようです。しかし、それを飛び越えてくるような者がいる。これは強盗であり盗人である。門から出入りする者が本当の羊飼いである。いったい「盗人、強盗」というのは誰かというのは次のところでまた出てきます。

<sup>2</sup>門から入る者が羊飼いである。<sup>3</sup>門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。

当時、羊飼いたちが世話をしている羊というのは、数はそんなに多くはなかったという。



だから、だいたいそれぞれの羊に名前を付けて、「太郎、次郎、花子、……」という調子で全部名前を付けて、呼んで連れて出していたようです。しかも、羊はまた羊飼いの声を聞き分ける。

4 自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立つて行く。羊はその声を知っているの、ついて行く。<sup>5</sup>しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。<sup>6</sup>イエスはこのたとえをフアリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことかわからなかった。

私たちにとりましては、いろんな宗教がありますよね、いろんなお誘いがあります。特に、不幸なことがありますと、いろんな宗教が寄ってきて、

「あなたの祟り<sup>たた</sup>はこうですから、これをどうしなければいけません」

とか言ってお誘いがくるようです。私の所には来ませんがね（笑）。ところが、何が本もので、何が偽りかというのは直感でわかる。理屈ではなくて直感で、

「なんとなくうきうきいらない、なんとなくいやだな」

とか、理屈でなぜといわれても説明できない。しかし、「何となくいやだな」とか、「何となくひかれいく」とか。それはこつちに欲得があるとだめですね。

「金を儲けてやろう、何ぞひとつうまい話はないかな」

と思っていると、「儲かりますよ」という宗教が現れてきたりして、そういうのに引つかかっただめです。

やっぱり羊飼いの純粋な羊飼いでいてくれるし、

「羊飼いは羊のために命を捨てる」

という、そんな素晴らしい羊飼いに付いていく羊も同じ質でなければ、これはだめなんです。

### ●わたしは羊の門である

そこでまた今度はあらわに言われた。

7 イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。

私という門。さつきは石垣で囲われた囲いの中に一つだけ門があった。その門を通って行くということだったけれども、今度は

「私が羊の門である」

という。私を通して入る者は生命<sup>あずか</sup>に与る。私を通らないでどこかへ行こうとしている者は決して生命に与らない。

8 わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。

これは註解書によれば、パリサイ人だとかさういった人たちを指しているという。

しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。

さつきの目を癒された方も言うことを聞かなかった。



9 わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる。その人は、門を入りして牧草を見つける。10 盗人が来るのは、盗んだり、屠<sup>ほふ</sup>ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。

「羊の装いをした狼」というのがマタイ伝に出てきます。

「偽<sup>にせ</sup>預言者に気をつけなさい。彼らは言うことが立派であったり、為すことも一見立派そうにみえるけれども、彼らは羊の装いをした狼である」

と。それから、

「私はあなたの名によつてこれこれのことをやりましたと言ったつて、絶えて汝を知らんと言うよ」

ということがマタイ伝の山上の垂訓の7章の所に出てきたと思います。

わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。

11 わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。

本当に命を捨てるような羊飼いがいたかどうかは知りませんよ、この当時。狼が来たら逃げていくようなのがいるのではないかと思えますけれども。ここでは、良い羊飼いというのは羊のために命を捨てる。ただアルバイトで来ている羊飼いはだめだという。これは狼が来たらサツサツと逃げ出す。

12 羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は羊を奪い、また追い散らす。——13 彼は雇

い人で、羊のことを心にかけていないからである。14 わたしは良い羊飼いで

ある。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。15 それは、

父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。

さあ皆さん、

「私は自分の羊を知っている。羊も私を知っている。私は誰々君を知っており、誰々

君は私を知っている」

と。今度は私どもは、

「主よ、あなたは私の羊飼いです。あなたは牧者、私はその羊です。あなたと私とは切つても切れない絆<sup>きずな</sup>で結ばれています」

と、こういうふうには私たちが告白しないと。詩篇の23篇にありますね。

「主はわが牧者である。我に乏しきことなし。主は私を緑の野に伏させ、憩いの水<sup>みぎわ</sup>濱に伴いたもう。たとえ我、死の陰の谷を歩むとも、禍<sup>わざわい</sup>を恐れじ。汝われと共にいませばなり。汝の笞<sup>しもと</sup>、汝の杖、我を慰める。」（詩篇23・1～4）

そういう、詩篇の中の一素晴らしいもの一つといえるあの23篇。これが本当の主と私どもとの結びつきです。

「たとえ死の陰の谷を歩むとも禍<sup>わざわい</sup>を恐れませぬ。あなたが一緒に居てください



るからです」

と。私はさきほど、孫の翔しやうのことを話しました。ずうつと一か月ほどまだ意識が戻らない。私はその姿を見ておりましたときに、こう思いました。意識を失っている間、彼は死の陰の谷を歩んでいる。

「汝われと共にいませばなり」

という、主がそこにずうつと付き添ってくださっていて、この死の陰の谷を照らしてくださっている。そこは光なんですよ、光であり、安らぎであり、歓びの世界、そういう所を主に導かれて歩んでいるにちがいない。だとしたら、死の陰の向こうにある素晴らしい御国へも案内していただいているかもしれない。だから、決して彼は不幸ではない。素晴らしいものを今、夢みているのではないかと。

「彼は死にたるにあらず、寝いねたるなり」

と、これは本当に死んだ人に対してイエスは仰つたんです、ヤイロの娘に。

「人々はあざわらう」

とあります。私は、あの子は本当に眠っている。主のみ懷でスヤスヤと眠っている。一応感覚を奪われて、痛みを知らないで眠っている。それは素晴らしい所へずうつと連れて行っていただいているのではないか。そして、今度はいつか目をパッチリあいて、

「ああ、楽しかったよ」

と言ってくれたらなああと、そういうことを夢見ている。私は決してそれは単に夢見ているだけではなくて、現実ではないだろうかと思つて、按手しながら、

「主よ、どうぞ、この子といつも一緒にいてください。あなたがいてくださる所が天国なんですから。この魂をどうぞ抱いていてください。最後までそうなさってください」

と。これが私の祈りなんです。ですから、この「羊飼いと羊」はそうなんですよ。

「私は良い羊飼いだ。自分の羊を知っている。翔のことを知っているよ。翔も私を知っているよ」

「<sup>15</sup>それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じで

ある。わたしは羊のために命を捨てる。」

と。本当に命を捨ててくださった。「命懸けの愛」といいますけれども、本当に命を捨ててくださった。

私は昨日の夜、テレビで「モンテンパの夜はふけて」という番組を見て本当に感動しました……。

〔註 NHK番組「モンテンパの夜はふけて」(半世紀ほど前の昭和28年、ひとつの歌が世間の話題をさらった。「あゝモンテンパの夜はふけて」。当時フィリピンのモンテンパ刑



務所に収容されていた日本人の戦犯死刑囚たちが日本への望郷の思いを込めて作詞・作曲した歌。この歌は戦犯たちの運命に同情した歌手・渡辺はま子が歌い大ヒット。やがて戦犯たちの命を救うことにつながってゆく」

ああいうのを見ていたら本当に、「どの宗教」という話ではない。本当にその人たちと一心同体となって最後まで尽くす。……愛とか何とか口では簡単に言いますが、この人のために自分は献げる」という姿なんです。イエス・キリストというお方は万人のためにご自分の尊い命を献げてくださった。この現実、厳粛な事実、これにはもう胸打たれざるを得ないですね。私はそう思う。

そしてここに出ていますように、

「<sup>15</sup>……わたしは羊のために命を捨てる。<sup>16</sup>わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。<sup>17</sup>わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してください。<sup>18</sup>だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟<sup>おきて</sup>である。」

定めであると言いたい。父から受けた私の定め、これは自ら命を捨てること。それをおして私は再びその命を得ることができる。誰かが無理やりに奪い取るのではない。私が自ら捨てるのだと。

現象的にいいますと、イエスは捕まえられ審判を受ける。そして十字架のゴルゴタの丘へと歩かせられる。そして磔刑<sup>はりつけ</sup>にされる。人々が十字架に付けたけれども、イエスは「私は自ら自分の命を捨てる」と言っておられる。しかも、あの十字架の上で、

「彼らを赦してやってください。彼らは自分のしていることがわかっていないのですから」

と言っておられたでしょ。……さきほどのテレビの番組で「憎しみに代えて赦しを」という言葉が紹介されました。イエス・キリストという方は、本当に人々がゆえなくキリストを苦しめたわけでしょ。

「私がしたどのようなことのためにお前たちは私に石を投げようとするのか」とあとで言っておられます。そういう人たちに対して、背きをむしろ身に引き受けて、我々の中に巣くっている背きという罪を一身に引き受けて、審判を受けてくださったっている。

「罰せずにおかないものを罰する」

と書かれましたね。その罰をキリストが一身に背負ってくださったっている。これは自分の身に覚えがある者だけがわかることです、自分は神さまの前に立てる人ではないと。……



「<sup>17</sup>わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。<sup>18</sup>だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」

<sup>19</sup>この話をめぐって、ユダヤ人たちの間にまた対立が生じた。<sup>20</sup>多くのユダヤ人は言った。「彼は悪霊に取りつかれて、気が変になっっている。なぜ、あなたたちは彼の言うことに耳を貸すのか。」<sup>21</sup>ほかの者たちは言った。「悪霊に取りつかれた者は、こういうことは言えない。悪霊に盲人の目が開けられようか。」

<sup>22</sup>そのころ、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた。

この「神殿奉献記念祭」というのは註解書によりますと、次のようなことが書いてある。「アンティオコス四世エピファネス（前175～前164年）が汚した神殿を、前165年の頃にキスレルの月（11～12月）にマカバイのユダが清めて新たに奉献した。このことが毎年同月（11月頃）に8日間、記念として祝われた」ということが書かれています。だから、冬なんです。

冬であった。<sup>23</sup>イエスは、神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられた。<sup>24</sup>すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。」<sup>25</sup>イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。<sup>26</sup>しかし、あなたたちは信じない。わたしは羊ではないからである。<sup>27</sup>わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。<sup>28</sup>わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。<sup>29</sup>わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。<sup>30</sup>わたしと父とは一つである。」

断然たる宣言がここにあります。

「わたしの羊ではないからあなたたちは信じない。しかし、わたしの羊であるなら、わたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。」

「はい、そうです、主イエスさま。あなたは私の羊飼い、私はあなたの羊です。あなたは私に永遠の生命を下さいました。だから、決して私は滅びません。誰もあなたさまから私を引き離すことはできません。おん父がイエスさまに与えてくださったこの私、これはどんなものよりも素晴らしいと、あなたは言ってください」



ています。ありがとうございます。あなたのおん手から私を奪い去る者は誰もいないですから」

とこう言つて、ここを読んだ時にその祈りをするんです。

### ●安息日を破り神を冒瀆した

31 ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして、また石を取り上げた。32すると、イエスは言われた。「わたしは、父が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中のどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」33 ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒瀆したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ。」34そこで、イエスは言われた。「あなたたちの律法に、『わたしは言う。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。35神の言葉を受けた人たちが、『神々』と言われている。そして、聖書が廃れることはありえない。36それなら、父から聖なる者とされて世に遣わされたわたしが、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒瀆している』と言うのか。37もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。38しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るだろう。」39そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。

ここに、ユダヤ人たちは、イエスが善き業をなさったから、それを不服として石打ちしようとしているのではない。人間の分際で己れを神とした。

### 「私と父とは一つである」

ということとは、父と同格、同質です。父は神さまですから、イエスはご自分を神となさっているわけです。だから、

「善き業のことではない、神を冒瀆したからだ。あなたは人間なのに、自分を神としているからだ」

と。結局、イエスが十字架にかけられたのは、「安息日を破った」という罪と、「神を冒瀆した」という罪、この二つなんです。

安息日のことに関しては、他の福音書でもそうですよ。マタイ、マルコ、ルカを見ましても、ことごとく安息日にいろんなことをなさっている。これはいかに安息日という神さまの本来の愛の律法であったものを、彼らは死の律法にしまっているか。命を奪おうという縛りをかけて律法にしているという、その偽善に対して戦われたわけです。つまり、本来の安息日というのは——一週に七日ありますね——その六日間は一生懸命に働きなさい。も



ちろん、神さまを信じながら働くんですけれども、とにかく六日間は一生懸命に働きなさい。しかし、七日目は一切、人間の業は休みなさい。公に胸を張って休みなさい。安心して休みなさい。そして、その日は神さまの懐の中に安らぎなさい。神さまから生命を受けなさい。安息日は神さまから生命をいただく、そのために公おおやけに休みをいただいた公休日だ。「なまけもの！」と言われなくて済むよと。

これはありがたいんですよ、学生生活なんかしてますと、これは無限無量でしてね、どこまでやったってキリがない。休んでいると、

「ちぼっつてはだめ！」

と言われる。裁判官もそうです、休めないんですよ。それに対して、公に休んでいいんだよ、お前さんはさぼっているのではない。これは安息だ、神さまが下さった安息だ。その日は公に休んでいい。神さまの御意だ。神さまはそんな目茶苦茶に働くことを望んでおられない。一週の六日間は一生懸命に働きなさい。七日目は大手を振って休みなさい。しかも、それは神さまから生命をいただく日ですよと。

だから、無理して教会に行くのではないんですね、何か義務で教会に行っていたらだめですよ。

「しよがなから教会に行こうか」

とか(笑)。牧師さんは20分以上しゃべったら嫌がられますから、20分しかしゃべれない。ヨーロッパでもそうです。人々は教会へ来る時には何か神妙な顔しているけれども、出てくる時には

「やれやれ、これで終わった、解放された」

という感じで、いそいそと出て行って、それからピクニックに行ったりいろんなことをやるわけです。何か義理で礼拝を守っているような印象を私は持ちました。牧師さんの説教も非常に道徳的な説教が多かった。

「本当に生命の御霊をここで受けましょう」

とか、そんなことは言わない。かなり倫理道徳的な教えを、

「現代社会ではこうあるべきである」

なんていうことを語っていました。ルター系の教会でした。それでもとにかく、日曜日は教会に行くということ、まだいいんです。しかし、それもだんだんパーセントが減ってきているようですね。人口の中で登録したクリスチャンはたくさんいるんだけど、それがみな行かなくなってきたということも聞きました。そんなのではだめです。

本当に休むというのは、神さまのみ懐の中に休む。神さまはその時に働いてくださる。それでイエスは

「私も働くんだ」

と言って、安息日に牛や驢馬が井戸に落ちたら、すぐ助けてやるではないか。



「安息日だから今日はだめ」

なんてやってないではないかと。そうしたら、18年間も身体が屈かがまつて動かなかった女性を癒された。その他いろんな癒しの業をなさった。これは神さまの恵みのわざだ。神さまが働かれる。人は休んでいる。神が働かれる。神さまのお働きになる日が、今のいわゆる安息日である。

確かに旧約聖書の創世記では、

「神が初めの六日間で創造の業をなさって、七日目に休まれた」

と、それが安息日になったけれども、キリストの受けとり方は逆なんです。人々は六日間働く。七日目は神さまが働きたもう。その愛の御業は生命を受けとるため。それを現わしていかれた。しかし、

「それは、安息日を破るから怪けしからん、自分を神と等しい者に行っているから怪しからん」

と。これがパリサイ人の、当時の代表的な宗教家の判断であつた。とうとう、イエスはその犠牲になってしまったというわけです。

「<sup>34</sup>そこで、イエスは言われた。「あなたたちの律法に、『わたしは言う。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。」

と。これは詩篇82篇5節に出てくる。

「アサフの詩。神は神聖な会議の中に立ち神々の間で裁きを行われる。

ここに「神々」という語が複数出てくる。神さまと神々。本当の神さまと——それからちよつと落ちるかもしれないけれども——神々もいる。そんな感じですね。

<sup>2</sup>「いつまであなたたちは不正に裁き神に逆らう者の味方をするのか。<sup>3</sup>弱者や孤児のために裁きを行い苦しむ人、乏しい人の正しさを認めよ。<sup>4</sup>弱い人、貧しい人を救い、神に逆らう者の手から助け出せ。」<sup>5</sup>彼らは知ろうとせず、理解せず闇の中を行き来する。地の基はことごとく揺らぐ。<sup>6</sup>わたしは言った「あなたたちは神々なのか皆、いと高き方の子らなのか」と。<sup>7</sup>しかし、あなたたちも人間として死ぬ。君侯のように、いつせいに没落する。<sup>8</sup>神よ、立ち上がり、地を裁いてください。あなたはすべての民を嗣業とされるでしょう。」(詩篇82・1～8)

これは不思議な詩篇ですね。だから、ここで「神々」といわれているのは人間なんです。

「<sup>6</sup>わたしは言った「あなたたちは神々なのか皆、いと高き方の子らなのか」と。<sup>7</sup>しかし、あなたたちも人間として死ぬ。」

と。文語訳で見えますと6節、

「<sup>6</sup>我いえらくなんじらは神なりなんじらはみな至上者の子なりと。<sup>7</sup>然さとんなんじらは人のごとくに死にもろもろの侯さのなかの一人のごとくたおたねん」



と。

「我いえらくなんじらは神なり」

とあるのを小池先生は

『なんじらは神々なり』とすべきだ」

と仰いました。

「我いえらくなんじらは神々なりなんじらはみな至上者いとたかきものの子なり」

口語訳の方では、

「あなたたちは神々なのか皆、いと高き方の子らなのか」

と問いかけている。イエスはここを引かれた。この詩篇を「律法」というふう言い換え  
ておられますけれども。

「<sup>34</sup>そこで、イエスは言われた。「あなたたちの律法に、『わたしは言う。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。<sup>35</sup>神の言葉を受けた人たちが、『神々』と言われている。そして、聖書が廃すたれることはありえない。<sup>36</sup>それなら、父から聖なる者とされて世に遣わされたわたしが、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒瀆すたしている』と言うのか。<sup>37</sup>もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。<sup>38</sup>しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るだろう。」

どこまでも上うわべ辺ではない。本体です。虚心坦懐にそのものを客観的に、曇りなき目で見なさいと、そういうことをイエスは訴えておられるけれども、彼らの目は曇っていて、それが見分けられない。彼らの心に厚い覆いがかけられている。上辺だけで見ている。それから、彼らは彼らなりの旧約聖書の解釈を盾にとつて、それでことごとくイエスをテストしているわけです。自分たちの尺度に照らして、「これは何だ、あれは何だ」と。全く平伏しひらふしの心とか、砕けの心とか、自分自身が救われなければならぬ、そういうふうにもならない存在存だということに全く気がつかないで、自分たちは高いところから見下して、イエスをも審あやみている。そういう姿すがたとしか思えません。

<sup>39</sup>そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。

<sup>40</sup>イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所ところに行つて、そこに滞在された。<sup>41</sup>多くの人おほくの人がイエスのもとに来て言った。「ヨハネは何のしるしも行わなかったが、彼がこの方について話したことは、すべて本当だった。」<sup>42</sup>そこでは、多くの人おほくの人がイエスを信じた。（ヨハネ10・1）

42



このあと、11章ではラザロの甦りのところが出てきます。12章では、「一粒の麦、地に落ちて死なずば」という話が出てきます。

ラザロが死んでしまった。そのことについても、人々は、

「あの盲人の目を開けた人もラザロを死なせないわけにはいかなかったんだね」と、そんなことを言っています。11章34節、ラザロが葬られている墓のそばです。

「<sup>34</sup>言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。<sup>35</sup>イエスは涙を流された。<sup>36</sup>ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。<sup>37</sup>しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようににはできなかったのか」<sup>38</sup>イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。」(ヨハネ11：34～38)

そういうお話が出てきます。ここから先はまた次回ということにします。

このヨハネ伝では時々、「ヨハネはどうだった」ということを言いながら進んでいる。こ

「<sup>40</sup>イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所に行つて、そこに滞在された。……ヨハネは何のしるしも行わなかったが、彼がこの方について話したことは、すべて本当だった。」

とある。ちよつと、洗礼のヨハネのところを見てみましょう。おさらいになりますが、1章19節。

「<sup>19</sup>さて、ヨハネの証しはこうである。エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わして、「あなたは、どなたですか」と質問させたとき、<sup>20</sup>彼は公言して隠さず、「わたしはメシアではない」と言い表した。<sup>21</sup>彼らがまた、「では何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねると、ヨハネは、「違う」と言った。更に、「あなたは、あの預言者なのですか」と尋ねると、「そうではない」と答えた。<sup>22</sup>そこで、彼らは言った。「それではいったい、だれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか。」<sup>23</sup>ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。

「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。」

<sup>24</sup>遣わされた人たちはファリサイ派に属していた。<sup>25</sup>彼らがヨハネに尋ねて、「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を授けるのですか」と言うとき、<sup>26</sup>ヨハネは答えた。「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。<sup>27</sup>その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物<sup>はきもの</sup>のひもを解く資格もない。」<sup>28</sup>これは、ヨハネが洗礼を授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニ



アでの出来事であった。

<sup>29</sup>その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。<sup>30</sup>『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。<sup>31</sup>わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。<sup>32</sup>そしてヨハネは証しした。「わたしは、霊が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。<sup>33</sup>わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『霊が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。<sup>34</sup>わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証したのである。」（ヨハネ1・19～34）

と。そんなことがここに書かれています。それから、洗礼のことに關しては4章の初めのところに、サマリアの女の話が出てくるところですけれども。

「さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、<sup>2</sup>——洗礼を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子たちである——<sup>3</sup>ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。」（ヨハネ4・1～3）

とあります。そして、先程の10章の終わりのところですね。

「<sup>40</sup>イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所に行つて、そこに滞在された。<sup>41</sup>多くの人がイエスのもとに来て言った。「ヨハネは何のしるしも行わなかったが、彼がこの方について話したことは、すべて本当だった。」<sup>42</sup>そこでは、多くの人がイエスを信じた。」（ヨハネ10・40～42）

その前にも各章の終に、「多くの人がイエスを信じた」とあるけれども、その人々はどこへ行つたのかしらと、私は聞きたい。みな

「それぞれ信じた、それぞれ信じた」

と書いてあるのに、最後は

「十字架につける、十字架につける！」

と大合唱でしょ。そういうのが私にとつては実に不思議ではない。

皆さんも、「そこでイエスを信じた」という中に皆さんは入れられているのだけれども、最後はどうであるか。最後まで貫いてくださいね、最後までイエスの弟子として。

「イエスのお弟子として、生くるも死ぬるも主と共に生きる」  
と、そんな気持ちで貫いていただきたいと思う。



## ● 生くるはキリスト、死ぬるもまた益なり

ピリピ書のところを少し見てみましょう。イエスの一番弟子といったら、パウロなんです。初めはイエスに逆らっていたパウロが、イエスに引っくり返されて、イエスの一番弟子になりました。ピリピの人たちがどのようにして導かれたかということ、使徒行伝16章に出てきますが、それは皆さんでお読みいただくとして、パウロは囚われの身でこのピリピの信徒たちへ手紙を書いている。その中で次のようなことを言っています。1章12節から。

「<sup>12</sup>兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立つたと知ってほしい。<sup>13</sup>つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、<sup>14</sup>主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。<sup>15</sup>キリストを宣べ伝えるのに、ねたみと争いの念にかられてする者もいれば、善意でする者もいます。<sup>16</sup>一方は、わたしが福音を弁明するために捕らわれているのを知って、愛の動機からそうするのですが、<sup>17</sup>他方は、自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようという不純な動機からキリストを告げ知らせているのです。<sup>18</sup>だが、それがなんであろう。口実こうじつであれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされていられるのですから、わたしはそれを喜んでいます。これからも喜びます。<sup>19</sup>というのは、あなたがたの祈りと、イエスキリストの霊の助けとによって、このことがわたしの救いになると知っているからです。<sup>20</sup>そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬるにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。<sup>21</sup>わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。<sup>22</sup>けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。<sup>23</sup>この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。<sup>24</sup>だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。<sup>25</sup>こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。<sup>26</sup>そうなれば、わたしが再びあなたがたのもとに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇りは、わたしゆえに増し加わることとなります。

パウロはもう生死を乗り越えているんです。

「生くるはキリスト、死ぬるもまた益なり。生くるにも死ぬるにも、私の身によってキリストが崇められますように。私の身の上に神の聖旨みむねが現れますよ



うに」

と、そういう思いで語っています。生きるということとはキリストを生きている。自分ではない、キリストが私の中で生きていらっしやる。そして、働かせてくださっている。

「死ぬ、この世を去るといふことがキリストの聖旨でいくことだから、いつそう望ましい。しかしながら、地上に残っていることがあなたの方のためになるならば、やはり残っていたほうが良いのだろう。どうしたらいいのだろうね」

と。そういうふうな、完全に生死を乗り越えた境地でピリピの人たちに言葉をかけています。そして、

27 ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。そうすれば、そちらに行つてあなたがたに会うにしても、離れているにしても、わたしは次のことを聞けるでしょう。あなたがたは一つの霊によつてしつかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦つており、<sup>28</sup>どんなことがあつても、反対者たちに脅<sup>おど</sup>されてたじろぐことはないのだと。このことは、反対者たちに、彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示すものです。これは神によることです。<sup>29</sup>つまり、あなたがたには、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。<sup>30</sup>あなたがたは、わたしの戦いがかつて見、今またそれについて聞いています。その同じ戦いをあなたがたは戦っているのです。」(ピリピ1・12～30)

少し飛ばしまして、2章12節。

「<sup>12</sup>だから、わたしの愛する人たち、いつも従順であつたように、わたしが共にいるときだけでなく、いない今はなおさら従順でいて、恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい。<sup>13</sup>あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。<sup>14</sup>何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。<sup>15</sup>そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がつた時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、<sup>16</sup>命の言葉をしつかり保つてでしょう。こうしてわたしは、自分が走つたことが無駄でなく、労苦したことも無駄ではなかつたと、キリストの日に誇ることができるようでしょう。<sup>17</sup>更に、信仰に基づいてあなたがたがいけにえを献げ、礼拝を行う際に、たとえわたしの血が注がれるとしても、わたしは喜びます。あなたがた一同と共に喜びます。<sup>18</sup>同様に、あなたがたも喜びなさい。わたしと一緒に喜びなさい。」(ピリピ2・12～18)

どのような状況にあつても、このようにして、

「キリストを喜びとし、キリストの中に私の生命がある、キリストの中に私の生命



がもう隠されてある。生くるもキリスト、死ぬるは益なり。」

と言って、完全に生死を乗り越えた、天の次元に生きているパウロです。一足飛びにそうなったとは思いませんけれども、私たちはみなそのように導かれているんですよ。この地上に居れば本当に望みのない状況ですけれども、目が開かれて、天界をいたただいたならば、そこは光輝いている。そして、キリストはご自分の生命を一人ひとりに無条件にくださっている。私たちと神さまとの間を妨げていた背きの心、肉の心、思い、それを全部キリストは十字架の上で引き受けてくださった。

「私が全部引き受けました。わがこと終わりぬ」

と仰ったから、私たちの罪は赦されたんです、背負われたんです。イザヤ書53章にありますね、

「その打たれし傷によって我らは癒されたり。彼は我らの罪のために打たれ、  
咎のために苦しめられたり」

というイザヤ書53章があります。イザヤ書53章という預言をキリストは一身に背負って、そして十字架にかかってくださいました。イザヤ書53章をお読みして終わりといいたします。

「わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあるうか。<sup>2</sup>乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のようにこの人は主の前に育った。見るべき面影はなく輝かしい風格も、好ましい容姿もない。<sup>3</sup>彼は軽蔑され、人々に見捨てられ多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠しわたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

<sup>4</sup>彼が担ったのはわたしたちの病彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのにわたしたちは思っていた神の手にかかり、打たれたから彼は苦しんでいるのだ、と。<sup>5</sup>彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり彼が打ち砕かれたのはわたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和が与えられ彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。<sup>6</sup>わたしたちは羊の群れ道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて主は彼に負わせられた。

<sup>7</sup>苦役を課せられて、かがみ込み彼は口を開かなかつた。屠り場に引かれた小羊のように毛を切る者の前に物を言わない羊のように彼は口を開かなかつた。<sup>8</sup>捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰か思い巡らしたであろうか わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり命ある者の地から断たれたことを。<sup>9</sup>彼は不法を働かずその口に偽りもなかったのにその墓は神に逆らう者と共にされ富める者と共に葬られた。

<sup>10</sup>病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ 彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは彼の手によつ



て成し遂げられる。11彼は自らの苦しみの実りを見、それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために彼らの罪を自ら負った。12それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびたしい人を受けける。彼が自らをなげうち、死んで罪人のひとりにならぬために数えられたからだ。多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのはこの人であった。」(イザヤ53・1～12)

と。不思議な53章というのがある。「主の僕の歌」といわれています。誰のことを言っているのか全くわからないけれども、イエスはこれをご自分について書かれた預言としてお受け取りになりました。そして、このとおりのことをなさったわけです。

ですから、このイザヤ書53章をどうぞ、皆さん、時々開いて、そしてまた福音書を開いていただけたらと思います。それではこれで終わりいたします。

## ● 祈り

最後に一言、お祈りいたします。

主イエス・キリストさま、この秋の晴れた良き日、多くの方々にここに導いてくださってありがとうございます。今日はヨハネ福音書の9章、10章を皆さんと一緒に深く味わうことができました。

主さま、福音書をとおして実は今、御霊の主さま、あなたが私たちに語りかけてくださっています。

「わが言葉は霊なり生命なり。あなた方は私の言葉にとどまっているならば、

本当に私の弟子である。そして、真理を知るに至る。真理はあなたたちを本

当に自由にする」

と。あなたこそ真理の真理、全きお方でございます。あなたはご自分のために何一つお求めにならず、ただ父の心を心として、その御意に自分を献げていかれました。そして、御意は、

「人の罪を背負え、人を救せ」

と。全く罪なきお方を、御意は十字架にかけ給いました。それによって、父なる神ご自身がご自身を審かれ、痛まれ苦しまれました。この父と御子のお二方の御意によって私たちはあらゆる罪から贖い出され、あらゆる咎を赦され、あらゆる病を癒され、霊肉ともにすつかり新しくしていただくことができました。見えるところはどうかであれ、私たちは見えないところで既に目ひられ、身体は健やかにされ、罪ゆるされて、あなたの子供としていただいております。感謝いたします。

そのためにもこそ、あなたは来てくださいました。良き羊飼いとしまして、さ迷える羊である私たちを導いてくださいました。



「良き羊飼いは羊のために命を捨てる。そして羊は羊飼いの声を聞きわけける」

と。どうぞ、この羊飼いと羊のように、主イエス・キリストさまと私たち一人ひとり、あなたに在って贖い出され救われた者たち、霊の目が開かれた者たちが、どうぞ、新しい生命を主に在って完<sup>まっ</sup>うすることができまますように。一人ひとりの上に神の御業が現れますように。

主よ、今日、ここにおいてになつていらっしゃる方々一人ひとりの上に、神の御業が現れますように。そして、神のご栄光となりますように。一人ひとりをあなたは新しく生んでくださり、新しい生涯を今からまた新しく歩みだすことができますように。

「誰でもキリストに在るならば新しく造られたものである。旧きは去った。視

よ、一切新しくなりたり」

と、あなたは宣言してくださっています。どうぞ、旧きを脱ぎ捨て、過去をかなぐり捨てて、あなたのいるところに飛び込んで、「主よ、私は信じたいんです。主よ、信じます」と、あなたの目を癒された方が叫びましたように、私たちは日々あなたに導かれ、あなたの生命をいただいで、あなたという道を歩んでいきとうございます。また今、病の中にある一人ひとりをどうぞ、あなたがそばに近くいてくださり、御手を按<sup>お</sup>いてくださり、

「我なり、おそろな、心やすかれ」

と、どうぞ慰めと励ましと、そして癒しをくださるように心からお願いたします。

主イエス・キリストの尊<sup>み</sup>き御名によってこの祈りを御前<sup>み</sup>にお献<sup>み</sup>げいたします。アーメン。

